

竹田聴洲と京都の念仏系民俗芸能の映像記録撮影について

齊藤 利彦

はじめに

竹田聴洲は仏教民俗の分野において、顕著な業績をあげた民俗学者であるのは言うに俟たない。その成果をまとめれば、民間寺院の成立過程を明らかにしたこと、村落における寺・墓・祖先信仰の歴史的関連を解明したことで、さらに、石塔成立以前には寺堂が詣墓の機能を果たしていたのを実証したこと、のちの民俗学における両墓制研究の基礎を築いたこと、などである。^①

このほかにも、多岐にわたる研究成果を残しているが、その全容は著作集全九巻によって、あまねくまとめられている。^②従来、竹田の仕事は個別分野ごとで評価され、また批判される傾向にあり、いわば、竹田民俗学として、全体像を持った形で検討されることはあまりなかった。この点について、岸田史生氏は個別ではなく、全体

にわたってその業績を検討しなければ、竹田民俗学の意義を正確にあらわすことはできないと指摘している。^③

最近年、竹田を評価する試みは、民俗学者や社会学者の手によって、研究の全容をもって再評価されつつあり、徐々に、その成果が生まれ始めている。^④ただ、今後の検討課題のひとつとして、著作集からもれている研究成果をどのように処し、また、どう位置づけるかという問題も浮上している。

従前の竹田研究で検討されていない課題に、京都市内の念仏系民俗芸能の映像記録撮影がある。竹田は昭和三十四年（一九五九）より、京都市内において念仏系民俗芸能の映像記録を撮影し、同三十五年（一九六〇）には祇園祭の調査も行なったが、この調査と映像記録撮影について考察することは、著作集からもれている竹田の仕事を探い取ることにつながり、同時に、竹田民俗学解明に寄与できるものと考ええる。さらに、芸能史研究上も、重要な民俗芸能調査、そして研究成果として評価できるものと考ええる。

ところで、竹田が恩師と考え、生涯にわたって敬愛したのが西田直二郎である。その西田も、竹田に先駆け、戦前の昭和八年から三ヶ年にわたって、民俗芸能の映像記録撮影を行ない、映像による「芸能」の記録化・資料化を図っている。^⑤林淳氏は西田文化史学と門下生・継承者について言及し、西田文化史学における民俗学分野の継承者のひとりとして竹田の名をあげているが、では、竹田は西田文化史学の「何」を継承したのであるか。換言すれば、竹田の研究成果、あるいは方法論の「何」が、西田文化史学を継いだことになるのだろうか。この点は学史研究として検証していかなければならないであろう。

そこで本稿は、竹田の研究のなかでも、学史に埋まれている、昭和三十年代に実施された民俗芸能の映像記録撮影について、若干の検討を加え、素描を試みたい。

第一章 竹田聴洲とその生涯

第一節 竹田聴洲と民俗学との出会い

竹田の生涯については、七回忌の際に編まれた『葩と實と』に詳細にまとめられているほか、平成十八年（二〇〇六）が生誕九十年であったことから、同十九年（二〇〇七）、佛教大学アジア宗教文化情報研究所（現、佛教大学宗教文化ミュージアム）で、その人柄と学問を振り返る回顧展が開催された^③。本節では、その生涯を、民俗学との出会いという視点を軸にまとめておきたい。

竹田は大正五年（一九一六）一月二十九日、大阪市西天満の浄土宗寺院妙香院に生まれ、西天満小学校、北野中学、第四高等学校を経て、昭和十一年（一九三六）四月、東京帝国大学宗教学・宗教史学科に入学した。彼は宇野円空の指導を受けるために上京したが、おりしも、宇野が東京帝大を退官したあとであり、その後任が、キリスト教史の大家、石橋智信であったこと、史学への転科も考えたが、当時の東京帝大の国史学の学風になじまないと思ったことなどから、一年で退学。文化史を講じる、京都帝国大学の西田直二郎のもとで学びたいと、改めて同大学に入学した^④。同期の横田健一は、竹田が自身と「同じ浄土宗の寺院（大阪市天寧寺）出身であり、文化史学で令名のある」西田の指導を受けたくて「京大へ入って来た」と回想している^⑤。

両氏とともに「西田先生の文化史学を学びたいという強い志向」をもち、また同時に、民族学・民俗学にも強い関心をもっていた^⑥。二回生になる頃には、竹田、横田ともに「民俗学に対する熱がだんだん高まり、柴田実先生を訪問しようということにな」^⑦り、同十三年（一九三八）六月七日、柴田実宅をふたりで訪れ、「勉強法」その

他を大いに話し、充実した時間を過ごしている。

この年、原田敏明、赤松智城両氏が京都帝大の民俗学関係の講義に出講しているが、ふたりとも受講し、その結果、横田は「斯学への関心を一層煽られた」と、回想している。¹³⁾さらに、「竹田君と私とは、そうした級友たちの中で特に柳田民俗学を心酔した点で、強く共鳴し合った」と当時を振り返っている。昭和十二年（一九三七）十月二十五日、二十七日、二十八日、十一月四日の五日間、柳田国男は京都帝大文学部史学科において「日本民俗学」と題する集中講義に出講したが、当然、ふたりは受講している。

当時の京都帝大史学科では、西田の民俗学に対する理解から、肥後和男、三品彰英、柴田実、池田源太、国分直一、時谷透、平山敏次郎、高谷重夫、五来重など、民族学、民俗学の方法論を取り入れた研究者が多かった。¹⁴⁾竹田は西田のもと、柳田国男の強い影響をうけつつ、講義で、読史会で、あるいは民俗学会で、そして、右の多くの先輩から、文化史学を吸収しながら、やがて、仏教民俗学の道へと歩んでいくようになる。

竹田自身が民俗学に「開眼」し、その後の「学問の方向を決定づけた」と言及しているのは、昭和二十一年（一九四六）十一月、京都府亀岡市の無量寺住職に任じられたことによる。民俗資料の豊富な居住環境のなかで、民俗への志向を強め、さらに、同二十四年（一九四九）八月より、佛教専門学校の大学昇格勧募のため、京都府北部地域の浄土宗寺院を行脚、同地方の族制・墓制習俗にふれたことが、以後の研究方向に大きな影響を与えることになった。こういったことをきっかけに、丹波地域を中心とする墓制や同族祭祀研究を開始、のちに、竹田同族論が形成されていくことになる。

こういったなか、柳田の著書から大きな感銘をうけたことを、自らつぎのように述べている。

柳田先生の『先祖の話』（昭和二年、筑摩書房）を紐いた時の、それまで眼を覆っていた鱗が一時に取り去

られたような感激は今以て脳裡に鮮やかである。¹⁶⁾

かくして、民俗学への誘いをうけた竹田は、その後、民俗学者として、大いに活躍していくのである。

第二節 竹田聴洲の昭和三〇年代

昭和三十年代、三十代後半から四十代後半といった壮年期の竹田の研究は、まさしく「進展と萌芽」という言葉で象徴できる。

昭和二十九年（一九五四）四月、同志社大学商学部の特任講師となり、安定した研究環境が整ったこともあろうか、竹田は精力的に研究を推進していく。それまでの墓制・同族祭祀・宮座研究をさらに発展させ、そのうえで、村落研究の一環としての墓制研究を精進に進めると同時に、地域の無名寺院を歴史民俗学的に分析していくといったもので、それは、浄土宗寺院の開創伝承を収録した『蓮門精舎旧詞』の研究でもあり、これらの業績は後述する博士論文、そして、大著『民俗仏教と祖先信仰』に結実していった。

さて、昭和三十五年（一九六〇）五月、処女出版となる『日本人の信仰』（創元歴史選書）を高取正男と共著として出版したのを皮切りに、同月に『浪華一心寺抄』を大阪一心寺から、同年十月には単著『祖先崇拜―民俗と歴史』を平楽寺書店より刊行している。また、この十年間に三十七本の論文や小文を著しているが、その大半は仏教民俗、とりわけ、近世村落と墓制や檀家制度に関するもので、旺盛な研究成果の発表は、それまでと変わらなかった。『葩と實と』では、この時期の竹田の研究を「墓に明け墓に暮れる」と表象している。

『日本人の信仰』および『祖先崇拜―民俗と歴史』の二冊について、竹田は西田とともに大きな影響をうけた柳田国男に謹呈し、同じく、社会学者の有賀喜左衛門にも贈っている。文面そのものは不確かであるが、竹田が危

惧していた、両者の論を「間違つて解釈しているところ」や「はきちがえているところ」があるから「これは間違っているのではありませんか」といった内容の手紙を添えたという。^①

これに対し、柳田からは、つぎのような文面の礼状が届いている。同三十二年（一九五七）十月十五日付竹田宛柳田の絵ハガキでは、

「祖先崇拝」の御著作惠贈給はり御礼申上候 此春から少々体に故障ありて こちらのはまだ一冊にまとめ不得或は御著によつて公表を要せぬことになり可申かと存候 創元社の方のもまだ拝読して居らず候 そのうちに入るべく存居候 御礼まで

只今すでに拝見中に候^②

といった、著書贈与のお礼が述べられている。その一週間後、再び柳田から竹田宛に封書が届く。

先日は貴著御贈与ありかたく存候 其後ほつ／＼と拝読しをり候が老年且つ病後にて中々はか行かず、それに御馴れにならぬ為か表現がよほど六つかしく読解に骨が折れ申候、此からは世を済ふ為にもつと平常の語たとへば家の御方方などにもわかるやう御心がけたまはり度候 いづれにしても是ほど細心に且つ民俗学界の報告資料を涉猟なさせ候ことは我々としては寔に感激の至りにて斯くてこそ労を忍びて休の日をつぶしてあるきまはつた甲斐があると皆々思ひ知り可申それが又是からの採集にはげみと張合ひととを与ふべく信じ申候 それよりも深く感じ候ことは小生等数十年の辛労も大半は盲捜しの為に費されほど大切な生存の問題がまだ片端すら常識とはならず是から骨を折つて新たに証出し且つ深思しなければならぬもの、斯くまで多かつたことにて是などは多くの時を持ち又余裕があつて長命した柳田自身などの自責せずには居られない点に候 しかし眞実読みながらほつ／＼考へ候までは是はともかく、自分が感得し且つ消化して人の養ひに

なるまで取次いたし候ことは時間が何としても足り申さず 是非共二三人のよんで判りさうな人にわけを話して細読を勧め置度存候 勿論この労を人に押付けるので無く自分も精々わかり且つ考へるやうに努め可申もせめて熱心なる勤説を以てわかりさうな人に分与したきものと存候 正直なことを言へば貴君の方法及び論断が此ま、採用せられてよいものならたゞ本屋小売店を刺激してもすむことなれども此場合は問題の大切さをいやといふほど思い知らせられつゝ其結論になほあまた、殊に方法とか見方といふものにも首をかしげなければならぬものが多いのだからよほど細心に批判しつゝ読む者を見付けねばならぬわけに候 此頃老翁の大なる幸福は青年の氣風が著しく改まり事実を他人の語に委託せず自ら果して「然りや否」をたしかめんとする者が急に多くなつて来たことに候 それで自分の本をさうせかゝと読過さずに一歩々々考へ行く間に一方に是ぞと思ふ二三人の若い人に先づこの本をよませ置き 後で一しよになつて考へて見ようといふことに候 仍て御願ひは平樂寺書店より直接小生手元へ三冊ほど先づ御送らせ給はり度ことに候 斯ういふ微々たる計画でもつゞけて居らぬと自分などは不安で夜もねられぬのにて候 乱筆御宥被下度候、¹⁹⁾

この封書では、冒頭、文章表現などについて再考をうながすものの、竹田が危惧した柳田民俗学理解の不備な点に関して、具体的な言及はない。しかし、竹田の論説に対しては婉曲ではあるが、手厳しく指摘している。最後に、柳田は若手にまず読ませたうえで一緒に検討するという方法をとりたいので、出版社から三冊送らせてほしいと依頼している。

この封書が自宅に届き、妻の保子より手渡されたとき、竹田は封を切るのもどかしいほどの勢いで開封し、眼を見開いて文面を読み、読後、大きく息を吐いたという。²⁰⁾

早速、竹田は平樂寺書店より自費で三冊、著作を柳田の元に送った。まもなく、柳田より、左のような文面の

封書が届く。

貴著新たに三冊書店より御送らせ給はりその代金は貴君御負担との御示し 是は由なき御心づかひにて小生がそれを甘受するわけも無く又何か手数を費さねばならず甚だ迷惑に候 今後もあること故斯ういふ慣行は止めることに素朴に処理するやうな方針にいたし度候 小生は只今斯ういふ交渉に時を費すことの出来る境涯では無之どうか老人の一刻を承認し今後も斯ういふ我ま、風習を御続けさせ給はり度 前の一冊は記念として家に蔵しその他の三冊は枉げて小生の計画を実現させ給はり度願ひ候 今後も自分の判断にて斯ういふ本の送り先を選定することを以て学問普及の一方法といたし度候 どうかこの新例を御開かせ給はり度候 東京は研究所を失ひ学会も危く居ても立つても居られぬ実状に付 枉げて老学究の志を成さしめられんことを念じ上候 それに御同意なくば寧ろ本の方を御返却申決意致しをり候 我儘な願ひに候 草々不一⁽²⁾

柳田は竹田が自らの費用で自著を三冊送ったことに対し、今後のこともあることから、以後、このようなことはしないように注意している。竹田としては、敬愛する柳田からの申し入れであったことから、すぐさま三冊を贈ったことが、逆に、不興とまではいかなくとも封書をもって注意されたことは堪えたらしい。⁽²⁾

さて、竹田は同三十五年五月、伊藤唯真・蘭田香融・千葉乗隆・北西弘・藤井学ら諸氏と「近世仏教研究会」を結成した。その主旨は当時、不振にあった近世仏教研究に活をいれるとともに、辻善之助以来の近世仏教墮落観を克服し、当該研究の進展を図るというものであった。この研究会は五年の活動を企図しており、『近世仏教史料と研究』を発刊するなどして近世仏教研究に大いなる刺激を与えた。当初の企図とおり、五年をもって解散したあと、竹田は「兼学会」なる、同人間の研究進展と交流を目的とした会を主宰するなどしている。⁽²³⁾

また、僧侶としては、同三十五年八月、丹波亀岡の無量寺より京都洛東百万遍知恩寺の寿仙院にはいった。四

十四歳の夏のことで、これ以降が竹田の京都時代となる。

昭和四十二年（一九六七）、ときに、竹田は壮年期の研究の集大成として博士論文執筆にとりかかる。そのきっかけは、同年に同志社大学より一年間の国内研修をうけたことによる。竹田はこれまでの研究を、博士論文「常民仏教と祖先信仰」としてまとめ、同四十四年九月、京都大学に提出した。主査赤松俊秀・副査岸俊男・同武内義範によって論文審査が行われ、同四十六年五月二十四日、京都大学より文学博士号が授与される^②。これに先立って、同年三月、堀一郎の斡旋をもって、学位請求論文は東京大学出版会から『民俗仏教と祖先信仰』と改題のうえ出版され、翌年三月、浄土宗より「学術奨励賞」を受賞した。

昭和四十年代の竹田は祖先崇拜を軸とした人類学を志向するが、その萌芽が同三十年後半からの研究であった。このように、昭和三十年代から四十年代の竹田は、従来の研究を基盤として、さらに、研究を進展させるとともに、それをまとめ、かつ新たな研究領域を開拓する時期であった。

第二章 竹田聰洲の映像記録撮影

第一節 同志社大学人文科学研究所の共同研究と竹田聰洲

竹田の昭和三十年代の仕事のなかで、分析や検討が等閑視されてきたのが、昭和三十二年（一九五七）四月から同三十六年（一九六一）八月までの四年間にわたり、同志社大学人文科学研究所より委嘱された「京都に於ける社会発展の諸条件の研究」班での調査研究であり、その成果である。

竹田と同志社大学、同大学の人文科学研究所との関わりは、昭和二十八年（一九五三）四月、竹田が同志社大学

商学部講師を嘱託されたことを始まりとする。十月には文学部講師も兼嘱され専門科目を担当した。翌年四月に商学部の専任講師となり、安定した研究環境が整う。同志社と竹田を媒介したのは、三品彰英であったという。同三十年（一九五五）には商学部助教授に昇格した。²⁶⁾

同志社大学では昭和十九年（一九四四）八月、「教育に関する戦時非常措置方策」を契機に、同志社大学研究所を設立し、戦時下における文科系大学の維持と、教員の研究継続を保証しようとした。昭和二十年の敗戦をもって、同研究所は同名でありながら、運営方針、体制、組織が改組され、新たな歴史をスタートさせる。その後、二度の規定改定を経て、昭和三十二年四月、同志社大学人文科学研究所と改称した。新規定にそい、研究調査部と資料部が設置され、運営の基本となる調査研究と資料蒐集の二本柱が打ち出される。²⁷⁾

同研究所は主体性をもった共同研究が特色であるが、人文科学研究所として改組された当初から二カ年は、「近代京都における社会発展の諸条件の研究」が単独で部門としておかれ、そのなかで、第一班「意識・思想（宗教・芸術・文明開化）」、第二班「教育・行政（自治）・政治」、第三班「産業構造」といった三班体制がとられ、各班ともに、特色ある研究調査を展開した。とりわけ、第一班は、三品の「京都方言史料報告」、竹田の「六斎念仏、鞍馬竹切りに関する民俗学的研究」を推進した。²⁸⁾

二カ年が過ぎた昭和三十四年（一九五九）四月、共同研究は第一研究から第三研究という三領域体制となり、それまで組織されていた「近代京都における社会発展の諸条件の研究」は、第一研究として存続することとなった。その構成は第一班から第三班にわけられ、第一班は「伝統文化の研究、特に言語、美術、芸能の資料蒐集」をめざしたが、このうち、芸能の資料蒐集の中心が竹田であった。²⁹⁾すでに述べたように、同三十二年四月から三十四年三月の二カ年で、六斎念仏や鞍馬の竹切りの調査、写真撮影などを行なった実績のある竹田は、班長の三

品のもと、京都の民俗芸能の記録化・資料化を活動目的としたが、その方法が映像記録撮影であったのである。

竹田が行なった京都市内の「念仏芸能」の映像記録撮影はハミリ白黒フィルムによってなされたが、正確なフィルムグラフィが存在しないため、詳細はつかめない。ただし、伝存テープその他を勘案すると、千本ゑんま堂大念仏狂言、壬生大念仏狂言、千本六斎念仏などである。

調査は三品を代表として竹田が責任者となり、同志社プロダクションと同大民俗学研究会を中心に行われた。

映像撮影と録音は別個に行われており、ソニー製ハミリテープを用いてエルモ映写機で撮影された。上映の際は映像テープと録音テープを同調させる方法を取り、フィルムのタイトルと録音テープのスタートを合わせて同時に上映させるといった具合に、映像と録音が整うよう工夫している。

また、竹田は祇園祭の研究調査を実施するなかで、

一昨年来、念仏狂言等の調査に用いた録音・映画の方法による記録は経費・技術の両面で限界のあることが明かになったのと、将来の出版などを考慮して、カラースライド一式によることを決定。³⁰⁾

と語っており、当該調査はかなりの出費となったことや、撮影技術や方法が十分でなかったことなどがうかがえる。この大念仏狂言の調査では、一枚ものの写真類は撮影されなかったようであり、その後の出版などは考慮されていなかったようである。

本研究班は、竹田が中心となり、大念仏狂言の映像記録撮影を中心としながら、「千本、壬生、中堂寺、小山郷、吉祥院といった京都の代表的な六斎」をカラー・スライド写真に納め、学内外で公開している。³¹⁾これらのスライド写真の伝存などは、いまのところ確かめられない。

撮影フィルムの公開上映などについては、

七月七日（木）

（前略）

壬生狂言録音映画（昨年度、当「第一研究」所収）公開試写後、夜になって研究室から放下鉾・長刀鉾の各神事係に電話で行事の段取を照会し、高取氏と明日の手はずを決める^⑭。

とあるように、同三十五年七月七日、祇園祭の研究調査で写真撮影などに忙殺されるなか、公開上映されたことが確認できるが、どこで、如何なる形で上映されたかは不明である。おそらく、同志社大学学内で、研究成果の公開として映写されたものと考えられる。

ところで、本研究班は翌年度に祇園祭関係諸行事の記録化・資料化を行った。本調査では、実に千余点に及ぶ写真撮影を実施している。調査の内実は、竹田「京都祇園祭調査探訪日記抄」^⑮に詳しい。

本調査の調査体制は、同志社大学の三品を代表とし、竹田が実働の責任者、その下に高取正男、河原正彦、写真家の清水実ら諸氏から構成され、同年六月下旬から八月中旬まで、調査は行なわれた。撮影された写真はカラー・スライド化され、十月二日、大学内外関係者に「公開試写」され、また、十一月十日の同志社大学創立八十五周年記念講演会において、竹田は「祇園祭の民俗学」と題する講演を行なっている^⑯。

撮影されたこれらの写真は、五十年前の祇園祭の姿や習俗をうかがい知る貴重な写真資料であるだけでなく、かつての京都の風景や町並み、そして、人々の暮らしなどを知ることのできる重要な民俗資料、都市民俗資料といえよう。これらの成果は、朝日新聞社から書籍として刊行される予定であったというが、その後、何かしらの事情により刊行されることはなかった。竹田夫人は「夫の仕事で世にでないもののひとつ」と語っている^⑰。

さて、竹田の調査研究において、他の「世にでないもののひとつ」が、上述した同志社大学人文科学研究

所の共同研究である、京都の「念仏芸能」の映像記録撮影であった。次節では、竹田が撮影した千本ゑんま堂大念仏狂言の映像記録について確認してみたい。

第二節 千本ゑんま堂大念仏狂言とその撮影

千本閻魔堂は正式名を引接寺といい、寺伝によると、寛仁年間に恵心僧都源信の弟子、定覚上人を開基とする。同大念仏狂言は京都三大大念仏狂言のひとつで、「ゑんまんどろの 狂言は だーれが先 はーじめた、でっかい坊主がはーじめた。」という、わらべ唄が伝えられていることから、京都の人々に愛された芸能である。⁽³⁶⁾

大念仏狂言という芸能の特色は無言劇であるが、千本ゑんま堂大念仏狂言は「閻魔庁」「芋汁」以外の演目に台詞がはいっており、この点が最大の特徴である。開催にあたっては、初日最初の演目に「閻魔庁」をやり、最終日最後に「千人切」が行われてしめられる。

現在は保存会によって伝承、運営されているが、戦前は西陣の特定の家男性のみで伝えられてきた。四月から五月にかけて二週間以上開催され、棧敷席や市もたつほどの賑わいをみせたというが、戦後、昭和三十九年（一九六四）以降、中絶してしまう。高度経済成長のなか、人々の経済環境や地域環境の変化が原因とされる。また、この時期、技芸を伝承されていた古老が次々と亡くなり、継承が困難となったことも中絶の要因のひとつである。しかも、昭和四十九年（一九七四）五月、不審火によって舞台である狂言堂が全焼、狂言衣裳は狂言堂の一階に保管されていたため罹災し、ことごとく灰となってしまった。⁽³⁷⁾ この火災により、千本ゑんま堂大念仏狂言の命脈も尽きたかのように思われたが、狂言面は庫裏内に保管されていたことから火難を逃れていた。これをうけ、若手六人が立ち上がり、保存会を結成し、技芸の伝承に取り組まれ、翌年には復活、現在の興隆に至って

いる。⁽³⁸⁾

さて、竹田が同大念仏狂言を撮影したのは、昭和三十四年五月二十四日のことで、狂言堂が焼失する以前の姿や、白黒ではあるが、焼失前の衣装によって演じる姿が映像として記録に残されている。したがって、貴重かつ大きな意義をもつ。この撮影については、千本閻魔堂大念仏狂言保存会にまとめた記録はないものの、記憶されている、あるいは若干の口承が存在する。

上述したように、同三十四年の五月二十四日、竹田は大念仏狂言を調査し、撮影を実施した。調査の人員など、スタッフについて詳細は不明だが、同志社大学民俗学研究会が調査の協力をしたことは間違いない。大がかりであったことは、後述する撮影方法などからも類推できる。

「閻魔庁」と「花折」、「千人切り」が撮影対象とされ、ソニー製八ミリテープでエルモ映写機によって撮影、音声は別に録音された。映写方法などは先述したとおりである。撮影当日は狂言堂の正面に櫓を建て、映写機と狂言堂の位置を平行とし、レフ板は狂言堂の下に設置した、という。⁽³⁹⁾

おわりに

以上、竹田聴洲が昭和三十四年以降に行なった、京都市内の念仏系民俗芸能に対する映像記録撮影について、若干の考察を行なった。今回の論及は、竹田民俗学を考察するにあたり、学史上、空白部分を埋める試みであり、素描であるが、竹田が実践した民俗芸能の映像記録撮影の背景などを解明した。

竹田の業績は著作集にまとめられているが、この映像記録撮影に関しては、著作集からもれているものであり、

これまでほとんど言及されてこなかった。いわば、竹田の全仕事のうち、空白部分に相当するといえる。竹田民俗学の全容を学史上に位置づける意味で、著作集からみながらも、重要な調査研究を明らかにしえたと考える。また、この映像記録は芸能史研究上も有意義なものであり、研究史にとどめ置かれる業績であり、評価されてしかるべきものである。

竹田が同志社大学人文科学研究所の共同研究において、京都市内の念仏系民俗芸能を調査するにあたり、実践として、映像によって記録し、資料化するという方法をとったのは、西田直二郎の映像記録撮影に影響されたと考えられ、さらに、その方法論を継承したものといえよう。

また、竹田の民俗芸能の映像記録撮影とはほぼ同時期、佛教大学の大規模な共同研究「現今わが国、民間に伝承されたる念仏信仰の総合的研究」においても、映像記録撮影が導入されている^⑩。竹田は、この共同研究班に参加しており、当該研究の活動において、自らの師、そして自らが継承した方法論を投入している。

西田が樹立させた西田文化史学、ないし京都文化史学の継承は人物によって語られることが多く、方法論の継承については、これまであまり論じられてきていない。しかし、竹田の民俗芸能の映像記録撮影は、明らかに西田の方法論の継承といえ、それは佛教大学の共同研究にも遺憾なく発揮されたのである^⑪。

〈注〉

- (1) 『日本史研究者事典』、『日本民俗学大辞典』、『竹田聴洲著作集』全九卷（国書刊行会、一九九三～一九九八年）各巻解説、『ある民俗学者の軌跡―竹田聴洲とその学問―』（佛教大学アジア宗教文化情報研究所、二〇〇八年）など参照。
- (2) 同右、『竹田聴洲著作集』全九卷（国書刊行会、一九九三～一九九八年）。
- (3) 岸田史生「竹田聴洲の民俗学とその思想的背景」（伊藤唯真編『宗教民俗論の展開と課題』法蔵館、二〇〇二年）。

(4) 大野啓氏の一連の研究や、京都民俗学会（兼第八六六回日本民俗学会談話会）の、つぎのようなシンポジウムなどが一例としてあげられよう。

日時・二〇一二年十二月二日（日）

会場・佛教大学二条キャンパス

シンポジウム（兼第八六六回日本民俗学会談話会）

テーマ いくつかの『先祖の話』——京都で読む柳田祖霊神学——

報告者

・菊地 暁（京都大学）「主な登場人物2——京大文化史学派の『先祖の話』受容——」

・大野 啓（佛教大学）「祖先・氏神と同族結合——竹田聰洲の業績から——」

・角南聡一郎（元興寺文化財研究所）「墓石研究と民俗学——柳田以前・以後——」

・土居 浩（ものつくり大学）「民間信仰論と宗教生活学との懸隔——高取正男を読み直す——」

コメンテーター

林 淳（愛知学院大学）・大谷栄一（佛教大学）・渡部圭一（早稲田大学）

コーディネーター・司会

菊地 暁（京都大学）

共催・日本民俗学会（シンポジウムのみ）・後援・佛教大学

なお、それぞれの報告者の発表内容の要旨は、『日本民俗学』二七三号に掲載されている。

(5) 拙稿「西田直二郎と民俗調査——田楽の映像記録撮影を中心に——」（『佛教大学アジア宗教文化情報研究所研究紀要』第四号、二〇〇七年）、同「西田直二郎とヨーロッパ留学」（『佛教大学宗教文化ミュージアム研究紀要』第五号、二〇〇八年）及び、近期刊行予定の同「京都文化史学派と民俗芸能撮影の系譜」（『芸能史研究』第二〇五号、二〇一四年）。

(6) 林惇「文化史学と京都」（『柳田國男研究』第四号、二〇〇四年）。

(7) 『葩と實と』（寿仙院、一九八七年）。

(8) 図録を兼ねた研究報告書として、前掲注1、『ある民俗学者の軌跡——竹田聰洲とその学問——』（佛教大学アジア宗教文化情報研究所、二〇〇八年）が刊行された。

(9) 前掲注7所収「閨々の本郷」及び「京洛に咲う」及び横田健一「交遊四十有三年——文化史・民俗学・旅——」（『葩實』寿仙院、一

- (10) 九八〇年) 十頁。
同右、横田氏論考。
- (11) 同右。
- (12) 同右、十二頁。
- (13) 同右十三頁。
- (14) 同右十一頁。
- (15) 前掲9、横田氏論考十一頁、蘇理剛志「京都帝国大学民俗学会について―関西民俗学の黎明―」(『京都民俗』第十九号、二〇〇一年)。
- (16) 竹田聴洲「緒言」(『民俗佛教と祖先信仰』東京大学出版会、一九七一年) 七頁。
- (17) 家族制度の比較研究会編「『家』研究座談会―竹田聴洲氏をかこんで―」(『社会科学』二十七号、一九八一年)
- (18) 『定本 柳田國男集』別巻四(筑摩書房、一九六四年) 六七〇頁。
- (19) 同右、六七一―六七二頁。
- (20) 竹田保子氏談。
- (21) 前掲注17。
- (22) 竹田保子氏談。
- (23) 前掲注7「墓に明け墓に暮れる」「学位を受ける」
- (24) 寿仙院『葩實』、寿仙院、一九八〇年) 三三頁及び前掲7、「学位を受ける」。
- (25) 同右『葩實』三三頁。
- (26) 同志社大学人文科学研究所編『人文科学研究所30年史』(同志社大学人文科学研究所、一九七五年) 一〇頁。
- (27) 同右、二三―二四頁。
- (28) 同右、二七頁。
- (29) 同右、二六頁。
- (30) 竹田聴洲「京都祇園祭調査日記抄」(『同志社大学人文科学研究所紀要』第四号、一九六〇年) 一九二頁。
- (31) 前掲注26、三一頁。

- (32) 前掲注30に同じ。
- (33) 同右及び参考として、「祇園祭を追って〔葩と實と〕寿仙院、一九八七年」。
- (34) 前掲注26、三一頁。
- (35) 竹田保子談。
- (36) 千本ゑんま堂大念仏狂言については、山路興造「大念仏狂言考」(京都 芸能と民俗の文化史) 思文閣出版、二〇〇八年)、拙稿「千本ゑんま堂大念仏狂言考」(日次紀事研究会編『年中行事論叢―『日次紀事からの出発』― 岩田書院、二〇一〇年)、同「京都の念仏系民俗芸能について―千本ゑんま堂大念仏狂言再考―」(『融通念仏の信仰と教義の邂逅』法蔵館、二〇一五年一月刊行予定)。
- (37) 同右、拙稿。
- (38) 同右、拙稿。
- (39) 千本閻魔堂大念仏狂言保存会よりご教示を得た。
- (40) 佛敎大学の大規模な共同研究「現今わが国、民間に伝承されたる念仏信仰の総合的研究」は、庶民生活に大きな影響を与えた念仏信仰と、それを基盤とした念仏系の民俗芸能の実態解明を目的としたもので、昭和三十六年より文部省科学研究費補助金の交付をうけ、四カ年かけて、全国の念仏信仰について、調査・研究を行った。この際、多くの文献史料が蒐集されると同時に、実地調査において、念仏行事・民俗芸能を写真で撮影するだけではなく、八ミリフィルムで映像を記録し資料化するという多角的な調査方法が採用、実行され、当時としては、できる限りの史資料が集められた。
- (41) 撮影された映像記録の一部は、成田俊治佛敎大学名誉教授より、佛敎大学宗教文化ミュージアムに寄贈され、現在、整理が開始されようとしている。

〈追記〉

本稿は平成二五年度佛敎大学宗教文化ミュージアム研究協力者としての成果の一部である。